

あ  
な  
た  
が  
あ  
る  
た  
め  
に

# ふたりで生き、ふたりで撮る

写真家夫婦

## ロンロン 榮榮 & インリ 映里

世界各国で高い評価を得る、中国人と日本人の写真家夫婦が北京にいる。  
ロンロンさんとインリさんだ。  
互いの作品に惹かれあうことから愛が芽生えたふたりは、  
共同で作品を発表するようになった。  
自分たちで撮り、自分たちが被写体にもなる、  
その作品にはふたりの人生が写っている。  
公私ともにお互いを最大のパートナーとし、生活自体が作品となっていく、  
そんなふたりの穏やかで情熱的な北京の日々を覗いた。

### PROFILE

榮榮 | ロンロン  
映里 | インリ

ロンロンさんは中国・福建省生まれ。インリさんは日本・神奈川県生まれ。2000年よりRongRong & inriとして作品の共同制作を開始。2001年、オーストリア政府の招待でレジデンスプログラムに参加。2006年、北京に撮影センター「三影堂撮影芸術中心」を建設着工。今夏オープン予定。

### 個展

- 2003年 蛻変容：ロンロン & インリの映像世界、798工場(北京)
- 2005年 超越：Walsh Gallery(シカゴ)
- 2005年 第3の場所：Alexander Ochs Gallerie(ベルリン)
- 2006年 六里屯：Chambers Fine Art (ニューヨーク)

※並行してドイツ、フランス、ベルギーなどで開催されたグループ展に出展





RongRong&inri\_2001



We are here 2002. Beijing. No.1



In The Jia yu guan. China. 2000. No.2

## ■ 自然体で暮らす写真家夫婦

家の玄関には、ざくろの木が植えてある。ふたりがこの家に越してきた3年前に植えたものだという。

夫・ロンロンさんは、毎朝その木の脇を歩いて家を出て、歩いて10分ほどの距離にある写真センター「三影堂撮影芸術中心」に足を運ぶ。ロンロンさんたちが立案したその施設は現在も建設中で、今年の夏オープン予定だ。3年ほど前から描き続けてきた夢が現実になる過程のすべてを、彼は目に焼きつける。

妻・インリさんは、朝から子どもの世話に忙しい。今年1月にふたり目の息子が生まれたからだ。

しばらくして、ロンロンさんが家に帰ってくる。今度は彼が子どもをみる。そして全員で朝食を食べる。中庭には8匹の猫が静かにたたずんでいる——。

ロンロンさんとインリさん。世界的に活躍する中国人・日本人の写真家夫婦は、北京の喧騒から離れた閑静な空間で、そんな毎日を過ごしている。ふたりは自然体で生きている。

## ■ 写真を「共通言語」とした出会い

福建省の農村で育ったロンロンさんは、幼い頃から絵が好きだった。しかし、勉強が苦手な美術学校に入れなかったことをひとつの契機に、写真という新たな道を志すようになった。

3カ月ほど学校に通っただけであとは独学。若き芸術家たちが暮らす、北京郊外の「東村(East Village)」に住み、アーティストたちの生活や、変わりゆく北京の裏に産み落とされる廃墟などを撮り続けながら、自らの表現を身につけていった。

95年には写真雑誌『新撮影(NEW PHOTO)』を自ら創刊し、アートとしての写真がまだ黎明期にあった中国で意欲的に作品を発表していった。レンズを通すことで現実に緊張感や瑞々しさを与える彼の作品は、徐々に評価を得るようになる。やがて発表の舞台は、ヨーロッパ、アメリカへと広がって



## ふたりで共有できる世界は、 第三者も共有できる。

いき、その存在は世界的に知られるようになっていった。

「東京でインリに出会ったのは、そんな時代でした」

すでに30代に入っていた99年のことである。

インリさんは、写真学校を卒業した後、94年に日本の新聞社のカメラマンとしてキャリアをスタートさせた。3年で会社を辞めてフリーになり、自らをギリギリまで追い込むことで自身の表現を追求していった。その頃の作品のひとつが、歌手の尾藤桃子を撮った「MAXIMAX」だ。

「彼女のCDジャケットを私が撮ることになっていたのですが、彼女が“爆発寸前”に見えたため、撮影の前にそのすべてを解放させる“儀式”みたいなことをやったら

いいかも、と考えたんです」

赤いペンキを歌手に渡し、彼女がそれを自由にぶちまける様子を撮った。インリさんの冷静な眼差しと、歌手の溢れ出るエネルギーは見事に融合し、力強い作品を生み出した。

99年、ロンロンさんと出会ったのは、そのようにしてインリさんがひとりの自立した写真家としてスタートを切りつつあることだった。立川で行われた展覧会でロンロンさんが作品を発表し、彼自身も来日していた。ロンロンさんの作品に、インリさんは強烈に惹かれた。

「私はそれまで他人の作品に強く感動するという経験はあまりなかったのですが、ロンロンの作品を見たとき、まさにそういう気持ちになったんです」

ロンロンさんもまた、インリさんの作品を見たとき、自分と通じ合う感性を感じたという。ふたりはまず、写真という「共通言語」でお互いを知っていった。

北京に戻ったロンロンさんは、言葉で話せなくとも、ただインリさんの声を聞くためだけに頻繁に東京に電話をかけた。その情熱はインリさんの心を動かし、翌年彼女が北京へ飛んだ。

それ以降、ふたりは“RongRong & inri”として共同で作品制作を始め、01年の春に結婚した。お互いに、公私にわたる最大のパートナーを見つけたのだ。

### ■ 中国のアーティストに発表の場を

それから6年。“RongRong & inri”の作品は、中国、アメリカ、ドイツ、フランス、フィンランド、イタリアなど多くの国で発表された。ふたりのコラボレーションが、新たな世界を生み出したのだ。

作品では、彼らは撮影者であるとともに被写体にもなる。富士山を背景にした凍る湖の上に、雲の間から後光のような光が

# 作品の中身は、自分たちの人生、生活がどうあるかで決まっていく。

こぼれ出る山の頂上に、あるいは廃墟となった北京の工場の中に、何も纏わぬままのふたりがいる。

静寂で壮大な風景の中にいるふたりの姿からは、彼らが育んできた愛情の確かさと、自然や現実への敬意が滲み出ている。ふたりが出会う前のそれぞれの作品にあった激しさは鳴りをひそめ、その代わりに大きな包容力に満ちている。インリさんは言う。

「中国に来て、ロンロンと生活を始めてから、急に視界が開けたような気がするんです。これまでは、自分を追いつめないといい作品はできないと思っていたけど、彼と出会ってから、そうではなく、もっと自分を解放して自由に生きる中から生まれる作品というのがあることに気づいたんです」

ロンロンさんが続ける。

「私たちの作品に理屈はありません。ただ美しい自然があるから撮るといっただけです。カメラがない時代に生きていたら、自分はその場所で詩を書いていたかもしれない。そしてその風景の中で自分たちも被写体になる。自分たちで撮って、自分たちが写る。100%自分たち。だから、私たちの生活そのものが作品になるんです」

現在ふたりの一番大きな仕事は、写真センターを完成させ、軌道に乗せることだ。

「中国のアーティストにとって、作品を発表できる場は多くありません。また写真をいい状態で保存するための場所もなく、その概念自体も希薄なんです。そういう場を提供する総合的な施設をここに造りたいのです」

いま北京には若い写真家たちが増えて

いるものの、彼らには活動の足場がないので「自分たちにできることを何かしたい」とふたりは考えた。その具体的な形がこの写真センターなのだ。

中国のアーティストは、集まって一緒に何かをするのが好きなのだという。それは、もともとアーティストが生きづらい政治的環境であったために、みなで協力しあって生きていくという習性ができていったからではないかとインリさんは語る。それは、個人での活動が多いように見える日本のアーティストたちとは大きく異なる。

「私ももともと、他の人と一緒に何か作品を作るなんて考えられないと思っていたタイプだったんですが、中国に来て変わりました。ふたりで共有できる世界は、第三者も共有できるんだっていうことに気づかされました」

## ■ 作品の中身は人生で決まる

現在の活動の中心は北京だが、彼らの視界にあるのは中国ばかりではない。ロンロンさんに「遠い将来の夢は何なのか」と聞いてみると、こう答えた。

「京都に住むことです」

ロンロンさんにとって日本は常に意識の中にある国だった。初めて京都に行ったとき、その日本らしいシンプルな美しさに

強く惹かれ、なぜか昔住んでいたかのような懐かしさまで覚えたのだという。インリさんと会う前のことだ。日本は「親しみがありつつも、まだ知らない世界」であり、ロンロンさんは、そこで暮らせる日を楽しみにしている。そして日中両方で写真を撮っていききたいという。

一方、インリさんにとって中国は、ロンロンさんと出会うまでは決して特別な国ではなかった。が、実際に住んでみると、中国の大陸的な大きさや流れている「気」の強さに惹かれ、自分にあっていると感ずるようになった。今では流暢に中国語を話し、食生活も中国的な感覚が身につく「口に入れるものすべてが薬」と考えるようになっている。中国での生活がすっかり染み込んでいるのだ。

ふたりが今後どんな人生を歩んでいくかは、本人たちにもわからない。しかし、彼らの中にアーティストとしての創作活動が常にあり、またインリさんが言うように「作品の中身は、自分たちの人生、生活がどうあるかで決まっていく」ということだけは確かなようだ。

ふたりの穏やかでかつ情熱的な「いま」の中に、今後生まれるであろう豊かな作品群の青写真が静かに眠っているに違いない。

Text by : コンドウユウキ

北京の喧騒から離れた場所にある自宅前にて。

家の中には、作品の制作や展示のためのこのような広い空間もある。暗室や各種撮影機材もすべて自宅に揃っている。



WEB

<http://www.rongin.com/>

